

# 日本人だけが知らない世界の常識

## 第七話 記念日編（前編）

一つの国や地域には、いろんな記念日があります。本来、これらは文化や歴史に基づいたその場所固有のもので、ところが、ここ数十年のグローバル化によって、世界各地に記念日が広まっていくようになりました。

たとえば、日本にはかつてエイプリルフールというものはありませんでした。しかし、海外の文化を受け入れていくなかで、日本でも四月一日をエイプリルフールにしようという動きがでてきました。今では、この日のテレビのニュースで、最初にエイプリルフールの話がでるほど根付いています。

ほかに思いつくのは、クリスマスやバレンタインデーですね。もともと欧米にあった習慣が日本に渡ってきているのです。特にこれらは、日本ばかりでなく、中東のイスラーム諸国にまで広がっています。「世界記念日」といえるまでになっているのです。

また、記念日でなくても毎週の休日についても同じことがいえます。イスラームでは金曜日が休みですが、キリスト教の欧米は日曜日が休みです。しかし、事業をグローバル展開している場合、金曜日を休日にする、どうしても置いてきぼりをくってしまいかねません。たとえば一分一秒を争う株の取引や商品の発注などで、大きな損失をだしてしまう可能性があります。場合によっては、それが致命的なものになるでしょう。

そこで最近中東では、金曜日ではなく、日曜日を休日にする会社が増えてきました。営業日を宗教ではなく、国際基準を軸にして定めているのです。日曜日の祝日もまた、グローバル化によって広まりつつある「世界記念日」だといえるのではないのでしょうか。

ただ、世界に広がった記念日が、そのままの形で受容されているとは限りません。たとえば、欧米のクリスマスと日本のクリスマスでは、内容に大きな隔たりがあります。欧米のクリスマスは、日本のお正月のようなもので、家族や親戚が集まり、料理やケーキを食べて静かに過ごしますが、日本では恋人たちが二人きりでロマンチックな時間を過ごすものとされています。つまり、文化の受容によって、その中身が少し変わってきているのです。

これと同じことは、他の国にも当てはまります。国ごとのクリスマスの過ごし方の違いを見てみましょう。

### フランス

料理：フォアグラ、シャボン（鶏）、白ブーダン（ソーセージ）、キャビア。

過ごし方：家族や親戚で過ごす。二十五日の昼から夜にパーティー。

プレゼント：一人が家族や親戚など数名から十数名にプレゼントを用意。

### アメリカ

料理：七面鳥、マッシュポテト、アップルパイなど果物系のスイーツ。  
過ごし方：家族や親戚で過ごす。二十五日の昼から夜にパーティー。  
プレゼント：一人が家族や親戚など数名から十数名にプレゼントを用意。

## 日本

料理：ローストチキン。欧米系のレストランへ行く人が多い。  
過ごし方：二十四日の夜を、恋人または友人や家族と過ごす。この日は休みではない。  
プレゼント：男性平均一万八千円、女性平均一万二千円。

## 中国

料理：大概の人は普段と変わらない。  
過ごし方：近年は日本のように恋人同士で過ごす人が増加中。  
プレゼント：男間女のプレゼントはあるが、リンゴを贈る習慣もある。

ところで現在、日本でクリスマスの経済効果がどれくらいあるかご存知でしょうか。第一生命経済研究所の調べによれば、クリスマスの生産波及効果は一兆一千万円になるそうです。バレンタインデーと比べて、倍以上の経済効果だとか。すごい力があるんですね。

海外で受容され中身に違いがでてきた行事は数多あります。バレンタインデーなんかもそうですね。バレンタインデーは世界各国に広がっていますが、国によって行事の中身に違いがあります。それを知らないと、大恥をかく羽目にならざるをえません。たとえば、中国におけるバレンタインデーの出来事を見てみましょう。

### 【中国のバレンタインデー】

日本のファッションメーカーにつとめる信行さん（三十一歳）は、入社十年目で念願の中国転勤になった。工場で、中国人労働者たちの仕事を管理することになったのである。

中国の工場には、女性の労働者が多かった。一列に机を並べ、ミシンを駆使して決められたデザインの服をつくっていく。

信行さんはそんな女性労働者の一人と恋仲になった。独身だったため、可能ならば結婚し、任期が過ぎたら一緒に日本に連れて帰って家庭を持ちたいと考えていた。

就任一年目が終わりに近づき、バレンタインデーがやってきた。信行さんは中国でもバレンタインデーがあることを部下に教えてもらっていた。これまで八年ほど恋人がいなかったため、久々にもらえるチョコレートに心を躍らせていた。

その日、仕事が終わると、中国人の恋人は信行さん呼び出し、プレゼントを差し出した。チョコレートだった。そこらへんの雑貨屋で売っているような何の変哲もないものだったが、安い月給で買ってくれたのだと思うと、飛び上がりたくなるほど嬉しかった。

この夜、信行さんは彼女と一緒にレストランで食事をし、ワインを飲んだ。気分が良かったので、時間を忘れてつつい飲み過ぎてしまい、気がつくとも午後九時を回っていた。そろそろ寮の門限である。信行さんはあわてて彼女をタクシーに乗せて寮まで送っていき、「それじゃ明日」と言って別れようとした。

すると、恋人がムツとした表情をした。

「他に言うことはないの？」

信行さんは首を傾げた。チョコレートのお礼にご飯をご馳走したし、お礼も言った。他に何があるだろう。黙って考えていると、彼女は目に涙を浮かべて怒鳴った。

「もういいわ！ あなたとなんか別れる！」

そして、そのまま寮へと走り去ってしまったのである。

信行さんは自分が何をしたのかわからぬまま頭を抱えた。すると、タクシー運転手がミラー越しに見て言った。

「お客さん、あんたあの子に薔薇をあげたの？」

「薔薇？」

「そうだよ。中国のバレンタインデーでは女の子からチョコレートをもったら、男の子はお返しに薔薇をあげなきゃいけないんだ。それで愛し合っていることを確かめるんだよ。彼女は薔薇をもらえなかったから怒ったんだよ」

ええ！ 信行さんは絶句したが、後の祭りだった。寮は女子専用だし、他の従業員の目もあるから下手な行動はできない。仕方ない。明日工場で事情を説明して謝ろう。そう思って自宅にもどった。

だが、翌日、恋人は会社へは出勤してこなかった。代わりに、辞表だけが届けられたのである。

クリスマスやバレンタインデーに何をするかは、国によってかなり違いがあります。

中国でも二月十四日はバレンタインデーですが、中国の女性は日本人のように「手作りチョコ」や「高級チョコ」を愛情の証として渡すことはありません。スーパーなどで売っている市販のチョコレートを贈るのが普通です。

これは手抜きということではなく、男性の側の嗜好の問題もあります。中国では、男性が日本人ほど甘いお菓子を食べることはありません。バレンタインデーでチョコレートをもっても、それを母親や姉妹などにあげてしまうことが少なくありません。甘いものを食べるのは男らしくないという風潮があるのです。だから、女性はチョコレートをあげるという行為は大切にすもの、「手作りチョコ」とか「高級チョコ」ということにこだわりをもたないのです。

また、日本と中国では、男性がチョコレートを「受け取る際の礼儀」が異なります。女性のなかには告白の意味を持ってチョコレートをプレゼントすることがあるでしょう。日本の男性は、その女性が好きでなくても、とりあえずチョコレートを受け取るのが礼儀と考えます。そして、もし本当に好きなら、一カ月後のホワイトデーにお返しをするというのが習慣です。

しかし、中国の男性は違います。付き合う気がなければその場で突き返してしまうのです。「俺、付き合う気ないからごめん」と言って受け取らないのです。逆にもし交際する気があれば、その日のうちに薔薇を贈り返します。恋人などにもらった時も、やはり薔薇で返すのです。日本人のように一カ月後のホワイトデーまで待つというまどろっこしいことはしません。

ここだけ見ると、日本人は恋愛に対してのんびりで、中国人の方がガツガツしているよ

うな印象がありますね。中国人と付き合う日本人は、後れを取らないようにちゃんと中国の文化を学ぶ必要があるでしょう。

日本人が中国人と交際する時に気をつけなければならない記念日として、バレンタインデーの他にクリスマスや七夕があります。日本ではクリスマスが年に一度の男女の一大イベントとされていますが、中国ではさほど盛り上がりません。都市に暮らす男女がデートを楽しむことはありますが、高価なプレゼントを贈ったり、恋人だから絶対に一緒にいなければならないという雰囲気があったりするわけではありません。一年の行事としてはそこまで重きのあるものではないのです。

ところが、七夕は違います。日本ではさほど大きなイベントではありませんが、中国では最大の恋愛イベントなのです。日本人にとってのクリスマスと同等の重さをもつといえるでしょう。

恋人たちはかならずデートをし、お互いにプレゼントを贈り合います。女性へのプレゼントで人気なのは宝石やバッグが一番ですが、日本ではあまり見られない化粧品を贈る習慣もあります。口紅やファンデーションを男性が女性に贈るのです。これまたちょっとしたお国柄といえるのではないのでしょうか。

さて、今度はもう一つのお隣の国、韓国のバレンタインデーについて見てみましょう。あちらでは、どうなっているのでしょうか。

韓国のバレンタインデーは基本的には日本と同じです。いわば、「日本版バレンタインデー」を直輸入しているのです。

少し説明しておきますと、「日本版バレンタインデー」は、欧米のそれとは内容が若干異なります。

欧米のバレンタインデーは、相手にカードを贈ったり、パーティーを開いて楽しくすごしたりします。近年はチョコレートやお菓子を贈ることもありますが、告白の日というより、クリスマスのように恋人で過ごすお祝いの日という意味づけです。

一方、日本では、クリスマスよりもう少し告白の日という意味合いがつよいですよね。チョコレートを贈るという行為が重要視され、それが告白や愛の確認の意味を持つ日となっています。

これは、バレンタインデーの「輸入」に際して、日本のお菓子メーカーが手を組んで戦略的にバレンタインデーをそのような日にしたためです。一九六〇年頃からお菓子メーカーやお菓子屋さんが一斉に「バレンタインデーは好きな人にチョコレートを贈る日」というキャンペーンをして、そのような文化をつくりあげたのです。これが「日本版バレンタインデー」で、韓国にもそのまま広まったのです。

ちなみに、欧米にはバレンタインデーはあるもののホワイトデーはありません。これもお菓子のプレゼントをさせるために、日本のお菓子メーカーがつくりあげた独自の文化です。一カ月後にお返しをする習慣があれば、そこでお菓子の売り上げがボーンと跳ねあがりますからね。「日本版バレンタインデー」の特徴は、ホワイトデーがあることともいえるでしょう。

韓国には、ここからさらに独自の発展を遂げた文化があります。それはホワイトデーの一カ月後の四月十四日に行われるブラックデーです。バレンタインデーにチョコレートを

もらえなかった男性が、黒いソースのかかったチャジャン麺を食べる日なのです。さらに一カ月後の五月十四日には、イエローデーがあります。この日はバレンタインデーを通してめでたくカップルになった男女が、辛いカレーを食べることになっています。これ以外でも、毎月十四日に次のような日が定められています。

- 六月十四日 キスデー：バレンタインデーでカップルになった男女がキスをする日。
- 七月十四日 シルバーデー：男女が銀のアクセサリーを交換する日。
- 八月十四日 グリーンデー：一人ぼっちの男が、韓国焼酎グリーンを飲む日。
- 九月十四日 フォトデー：男女が交際の記念写真を撮る日。
- 十月十四日 レッドデー：男女が食事に行き、ワインを飲む日。
- 十一月十四日 オレンジデー：男女がオレンジジュースを飲む日。
- 十二月十四日 ハグデー：男女が抱き合う日。
- 一月十四日 ダイアリーデー：男女がお互いに手帳をプレゼントし合う日。

情熱的な韓国人ならではの発展の仕方だといえるのではないのでしょうか。面倒臭がりや、消極的で知られる日本人カップルには、毎月恋愛の記念日をつくって祝う気概はさすがにないようです。発展の仕方にはお国柄がよくでるのでしょう。

では、中東のバレンタインデーはどうなっているのでしょうか。

中東でも、最近はグローバル化にともない、バレンタインデーを祝う人が増えてきました。宗教上、男女関係には厳しい地域ですが、バレンタインデーには女性が男性にチョコレートあげるのが習わしになっています。男と女がおおっぴらに交際できない文化でありながら、女性が男性に対して気持ちをつたえる小さなきっかけとして広がってきたのです。

ところが、近年、中東ではこうした波を懸念する声があがっています。サウジアラビアやイランなどイスラーム原理主義のつよい国では、「未婚の男女がなにやら不謹慎なことをしている」とか「欧米から入ってきた悪しき習慣が広まっている」とされて、バレンタインデーそのものを禁止しようという動きがでてきているのです。次がその記事です。

#### イラン バレンタインデーのお祝い禁止

イランでバレンタインデー（来月 14 日）を祝うカードやプレゼントなど一切の関連用品の製造が禁止されることになった。イラン印刷業組合が通達を出し、規制に従わない業者は処罰の対象とすると通告した。政府が業界を通じ指導に乗り出したようだ。

イラン労働通信によると、同組合の通達では、ハートをあしらったカードやポスターなど規制品目を細かく列挙している。

イランはイスラーム教シーア派を国教としているが、近年はクリスマスやバレンタインデーに贈り物を交換したり、パーティーを開く若者が増加。宗教指導者間でこうしたキリスト教的習慣を疑問視する声が強まっていた。

バレンタインデーの起源については諸説ある。一説では、3 世紀のローマのキリスト教聖職者、聖バレンティヌス（バレンタイン）が、兵士の結婚を禁じる皇帝の命に背いて兵士を結婚させ、処刑されたのが 2 月 14 日。バレンティヌスをしのぶ日が、愛の告白の日と

なつたとされる。バレンタインデーを巡っては、厳格なイスラム教スンニ派のサウジアラビアでも、関連商品の販売は好ましくないとして取り締まりを強化している。

(毎日新聞 2011 年 1 月 17 日)

きっと堅物の髭モジャの長老たちが眉間にしわを寄せてこういう議論をしているのでしょう。なんか、自由に恋愛をする若者に長老たちが嫉妬しているだけのような気がします。が……。

では、次に葬儀を見てみましょう。想像以上に文化の差があります。

### 【葬儀】

インドネシアのバリ島に嫁いだ日本人女性がいた。真理さん（四十一歳）である。

真理さんは日本で会社員をしていた頃から、年に二回かならずバリ島に遊びにやってきました。そこで知り合った地元の男性と恋仲になり、二年の交際を経て結婚したのだ。それから十三年、真理さん夫婦はゲストハウスをオープンし、つつましいながらも幸せな家庭を築いていた。

ある日、村で暮らしていた夫の母親が長い闘病生活の末に亡くなった。村で葬儀が行われるということだったが、ゲストハウスにはお客さんがおり、すべてを放り出して駆けつけるわけにはいかない。そこでまず夫に実家に帰ってもらい、真理さんは細かな用事を片づけ、従業員たちに留守中の仕事を任せてから、葬儀に出席することになった。

翌日、真理さんは町で黒い喪服を買い、夫の実家のある村に向かった。すでに葬儀ははじまっていたが、ハンカチを手にして神妙な面持ちの真理さんはびっくりした。なんと出席していた親族全員がお祭りのような派手な格好をしているのだ。金や銀の飾りがついた服を着てワイワイ騒いでいる。黒い喪服を着ているのは真理さん一人だった。

親戚の一人が真理さんの姿に気づいて言った。

「おい！ おまえはふざけているのか！ 死者を冒瀆するなら、今すぐ町に帰れ！」

「え、どういうことですか？」

「その黒い服のことを言っているんだ。そんな暗い服を着るような奴は家にあげられない。とっとと出ていけ」

どうやら黒い喪服を着ているのがいけないらしい。しかし、なぜなのだろう。

そうこうしているうちに、親戚は真理さんの首根っこをつかんで葬儀から追い出してしまった。

真理さんが家の外で呆然としていると、夫があわてて追いかけてきて謝った。

「ごめん！ 僕が説明するのを忘れていた。この村では、葬儀のときはできるだけ明るい派手な服を着ることになっているんだ。そうすることで個人が天国へいくのを祝おうと考えるんだよ。親戚たちは真理が黒い不吉な服を着て現れたことで、天国へ昇るのを邪魔しようとしていると感じたんだ」

そう、この地域では、死は天国への旅路と考えられ、できるだけ明るい服を着るように定められているのだ。真理さんはそれを知らなかったがゆえに、葬儀から追い出されてしまったのである。

真理さんは改めて文化の壁の高さを感じたのだった。

世界のほとんどの地域で葬儀、あるいはそれに準じるものが行われています。ただ、火葬か土葬か鳥葬かなど、内容に様々な違いがあるのは事実です。

このなかで日本人があまり知らないのが、喪服の違いでしょう。

日本でも、江戸時代ぐらまで、喪服は白いものとされていました。次の写真のようなものですね。それが明治以降、少しずつ海外の文化が日本に入ってきて、さらに喪服自体が和服ではなくスーツに移行していくなかで、黒いものに代わってきたのです。大正から昭和の初期にかけての時期に、かなりの人が黒い喪服を着るようになったといわれています。

今もって、中国や韓国では遺族が白装束を着ているのを考えると、喪服に関しては、東アジアで日本が一番欧米の影響を受けていることになるかもしれません。



(出典) [http://kosode.cool.ne.jp/images/aisatu/ikiteita/hare\\_e.html](http://kosode.cool.ne.jp/images/aisatu/ikiteita/hare_e.html)

では、欧米の人たちは、本当に真黒な喪服を着ているのでしょうか。実は、日本人ほど黒にこだわっているわけではないのです。

たとえば、アメリカでは葬儀の際、真黒いスーツを着る人は稀です。紺、ブルー、グレーなど、明るい色でなければいいわけで、喪服専用の黒いスーツを持っている人は多くありません。遺族以外の参列者についてはもう少し寛容で、肌の露出が激しくなければ、私服であっても変な目で見られることは少ないでしょう。

東南アジアなどでは、喪服という概念そのものがあまりありません。一般の人たちは私服で葬儀に参加します。ただ、政治家やお金持ちが亡くなった場合は、欧米の習慣に倣って、黒もしくはそれに近い色のスーツを身につけます。地位が上がれば上がるほど、欧米風のエチケットに倣うのが正しいと考える傾向にあるようです。

南アジアや中東なども似ています。庶民の間には正式な喪服を着る習慣はなく、普段着で参加することがほとんどです。ただし、遺族だけは伝統的な衣装に身を包んだり、坊主頭にしたりします。

ただ、面白いことに、農村部などではまたちょっと違ったりします。

以前、ベトナムの田舎で葬式に出くわしたところ、参列者たちがなぜか鍬をもっていました。意味がわからず尋ねてみたところ、次のような答えが返ってきました。

「ここらでは、故人に対して『あなたの葬儀に急いで駆け付けた』ということを示すために、葬儀には作業着を着て農具を持って出席する伝統になっているんだよ。喪服を着ると『のんびりといい加減な気持ちでやってきた』と見なされてよくないと考えられているんだ」

これも文化の違いですね。

日本のように全員が黒い喪服を着る場合もあれば、欧米のように、親族以外はある程度きちんとした服であればいいとする場合もありますし、農具を持って参加するような場合もあるということです。死者への思いの示し方は、実に様々なのです。